みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

日本領台以前の台湾における漢人と原住民族の交易についての一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松澤, 員子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003621

日本領台以前の台湾における漢人と原住民族の交易についての一考察

松　澤　員　子*

0.　はじめに
1.　台湾の原住諸民族
2.　台湾への漢人の移住
2•1.　オランダ以前
2•2.　オランダ占拠時代（1624-1661）
2•3.　鄭氏時代（1661-1683）
2•4.　清朝時代（1684-1895）
3.　漢人と原住民との交易
3•1.　交易制度
3•2.　鹿皮交易
3•3.　山地原住民への外来品の流れ
3•4.　山地へ流入した交易品
4.　むすびにかえて

0. はじめに

台湾における原住民族と漢人との接触を考える上で，漢人の開拓に伴う土地取得と交易が重要であることはいうまでもない。両者ともいまだ研究が進んでいないが，前者は土地譲渡に関する古文書集が最近出版されて，これに刺激されて，台湾で研究が進められているようである[1)]。しかし，原住諸民族と漢人との交易については歴史資料は非常に乏しい。特に山地原住民と漢人との交易は，平地に居住していた原住民を通じての間接的な交易か，また，たとえ直接に交易が行なわれていたとしても，密かに行なわれていたと考えられる。したがって，歴史の記述にほとんど現われないのである。

他方，日本が台湾を占有したとき（1895年），なおそれぞれ固有の文化を保持していた山地原住諸民族は，インドネシアやフィリピンなど近隣の少数諸民族に比べれば，比較的大文明の影響も少なかったと考えられてきた。筆者もまた，パイワン族の社会

* 国立民族学博物館第二研究部

1) 三田裕次氏が収集された古文書を張炎憲氏が編集した『台湾古文書集』が，1989年に出版された。その中には土地売買の資料133枚が納められている。今年(1990年) 3月台北・中央研究院で台湾史の研究者・張炎憲氏に直接ご指導いただく機会があり，原住民と漢人の土地売買の研究が進行していること，また交易についてはまだ研究が進められていないことなど数々のご教示をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

制度の研究を通じて，同じ見解をとってきた。しかし，漢人を通して直接または間接に入手したと考えられるモノが，台湾領有当時，すでに数多く原住民社会に存在したことは，植民地政府の調査資料に照らしても明らかである。この事実は，清代には未帰順の原住民居住区（「蕃界」と称された）へ立ち入りが禁止されていたにもかかわらず，なんらかの方法で交易が行なわれていたことを証している。

こうした漢人との交易が，原住民社会の生活様式や社会制度にどのような影響を与えたのか[2)]，一度は検討しなければならないと思っていた。そこで，この共同研究に参加した機会に，この課題を取り上げてみた次第である。しかし，日本統治初期に，かつての漢人と原住民との交易に関する調査は行なわれなかったようであり，また筆者が初めて現地調査に赴いた1970年代初期には，すでにそうした情報を収集することは不可能であった。したがって，こうした研究を進めるには，さまざまな文献資料の中から断片的な記述を集めたり，また国立民族学博物館はじめ，各地の博物館に収集されている原住民と漢人の標本資料を検討しながら，推論するほか手段がなさそうである。この小論は，歴史文献の調査も標本の検討もまだ十分でないにもかかわらず，現段階での2次的文献資料のまとめとして報告したい。筆者は今後も資料の収集と検討を続けてゆきたいと思っている。（なお，本文中で人名，地名，その他の漢字の表記にあたっては，支障のないかぎり，原則として当用漢字を用いることにした。）

1. 台湾の原住諸民族

漢人の渡台以前，台湾にはオーストロネシア語系統の言語を話す人々が，すでにここを占拠していた。これらの人々を，一般には，台湾の原住民族という。17世紀に台湾を支配したオランダは，西部地域（現在の恒春から新竹あたりにかけての地域）に言語や生活慣習の異なる数部族が居住していたことを村落名称とともに記録に残している。しかし，彼らは村落や部族間で絶えず互いに戦闘を繰り返しており，実態を知ることは困難であったらしい [Campbell 1903: 9255]。このように，オランダの記録から当時の原住諸民族の部分的な分布を知ることはできるが，その全容は，当時まだ明らかでなかった。そして，清代においてもまた同様であった。したがって，原住諸民族の客観的な分類や分布図は，平地に居住していた原住民がおおむね漢人社会に

2) 例えば，フェレルは，ポリネシアに似たパイワン族やルカイ族のラメジ (ramage) 型の構造をもつ首長制は，サーリンズ (M. Sahlins) によって提示されたようなポリネシアにおける農産物の余剰生産ではなく，オランダ当時の鹿皮という経済的余剰生産によって発達したものではないかという仮設を提示している [Ferrell 1969: 47]。

同化された後，日本の研究者によって完成されたものである［馬淵　1974a: 250–251］。その主要な業績として，馬淵東一が台北帝国大学の言語調査と自らの調査を基礎にして作成した民族分類と分布図［馬淵　1974c: 508］を図1に示そう[3)]。

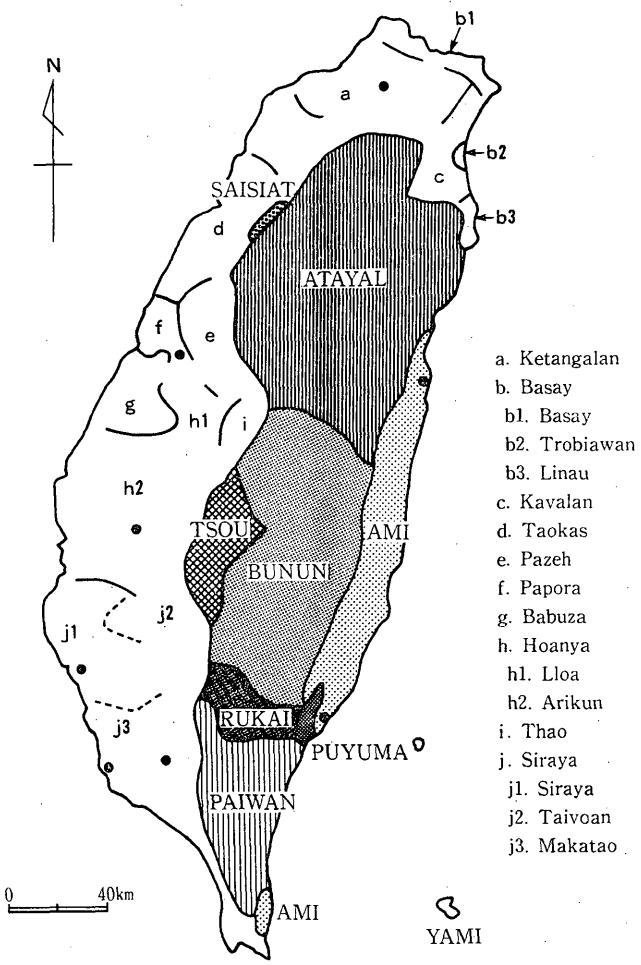


図1　台湾原住諸民族の分布　［馬淵　1974c: 508］

3) 清代には，大陸の慣例にならって，これらの原住諸民族を漢族化の度合に応じて，「生蕃」と「熟蕃」とに区別した言葉を用いている。平地に居住していた原住民は，すでにオランダ支配のもとで，帰順しないものは討伐を受け，また漢人の人口増加に伴って次第に同化されていったのであるから，文献資料に用いられている「生蕃」と「熟蕃」は，時代や地域によって異なり，次第に塗り代えられていった。したがって，「生蕃」や「熟蕃」という分類は妥当でない。また，平地の原住諸民族は，より早くに政治支配に服従したのは当然で，彼らは「平埔蕃」とも呼ばれた。日本植民地政府もこれらの呼称を踏襲した。他方，台領後期には「生蕃」を改めて「高砂族」と称するようになった。また，現在台湾では「高山族」と称しているが，最近少数民族運動が高まり「原住民族」が用いられている。しかし，「原住民」という語には漢化さ ↗

2. 台湾への漢人の移住

台湾がいつごろから漢人に知られるようになり，またこの島をいつ頃からタイワンと呼ぶようになったのかということについては諸説あるが [伊能　1902: 5–19]，明の初期の記録には台湾の原住民を「東蕃」と呼び，当時の彼らの社会事情を伝えているから [伊能　1902: 3–4]，その頃すでに漢人と原住民との接触があったことは確かである。しかし，台湾海峡を隔ててわずか150キロメートルの対岸，中国の福建省から漢人が大量に移住して来たのは，オランダの台湾占拠（1624年）の頃からであった。そして，「台湾」という名称が正式に用いられるようになったのは，清の康熙23年（1684年），台湾が福建省の1府として「台湾府」と呼ばれるようになってからである。ここでは漢人の台湾移住を大きく4期に分けて，それぞれの時期における原住民族との接触を考えたい（図2参照）。

2•1. オランダ以前

伊能嘉矩によれば [伊能　1902: 16–18]，12世紀初頭には，多くの漢人の漁民や海賊たちが福建から澎湖島[4] に渡来していた。そして，やがて明の嘉靖の頃（16世紀初めから中頃）には，澎湖島にいた漁民や海賊が一時的に台湾に来住し，その中にはここに永住する者もあったようである。しかし，その数はきわめて限られていたに違いない。台湾における漢人の最初の移住地は，西南海岸地帯，すなわち「南は臺江（今の台南海岸）及び打狗（同じく今の高雄）にして，北は今の笨港」[伊能　1902: 10] で，それらの港は小規模な中継貿易港として利用されていたにすぎなかったようである [中村　1953: 102]。

フェレル (Raleigh Ferrell) は，台湾の地理的位置に注目し，台湾が近代まで大陸や東南アジア島嶼地域から孤立していたとする見解を，こう批判している。すなわち，ここが早くから中国南部と東南アジア島嶼地域との海上交通の要所を占めていたこと，

↘ れた原住民も含まれる。さらに，複雑なのは，山地原住民といっても必ずしも山地に居住していたわけではなく，プユマ族やアミ族，またパイワン族の一部は平地に居住していたため，日本時代も中華民国の行政下でも，彼らの居住区は特別行政区に入れられず，平地山胞として普通行政区に置かれてきた。この小論では，原住諸民族を一般に「原住民」とし，必要に応じて固有の民族名称を用い，また平地原住民と山地原住民（日本の領有当時にはまだ固有の文化を残していたいわゆる高砂族）とに区別した。

4) 澎湖島は，海賊の蟠居する無法の地であったが，元末に一時この地に巡検司を置き，統治の端緒を開いた。しかし，明朝はその完全統治を困難と見て，洪武21年（1388年）巡検司を廃止し，島民を福建の漳・泉2府に引き揚げさせ，ここを無人の島にした。しかしその後，澎湖島はこれに服さない海賊の占拠地となった [伊能　1902: 16]。

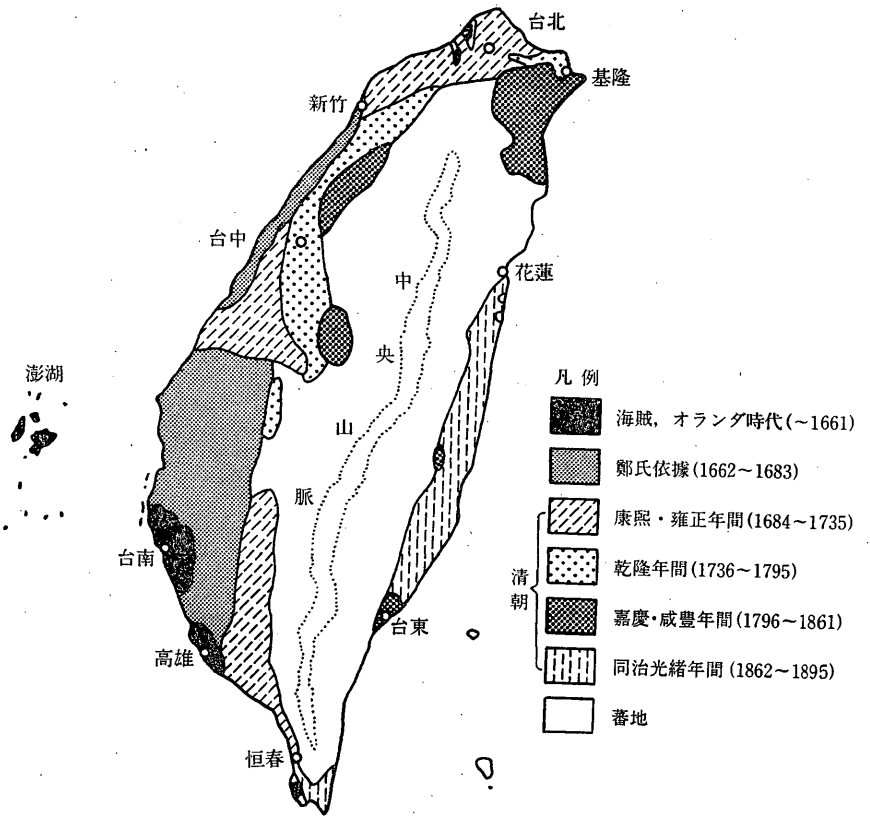


図2　漢人移民の進入地域（時代別）　[伊能　1902]

図2についての注釈：台湾銀行経済研究室〔編〕『清代台湾経済史』(1957) には，各地方への最初の拓殖の年代が表示されており，おそらくそれに依拠して作成されたと思われる図がある。その図は，ここに引いた伊能の図と完全には一致しないが（最前線がいくぶん後退している），基本的には大差がない。前者の図は，清代を一括して表わしているのに対して，伊能の図は，清代をいくつかの時期に細分してあるので，ここではそれを採用した。

そして西暦紀元から近海で海上の往来が活発であったことを考慮すれば，原住民と航海者との接触は近代以前に十分ありえたであろうし，また難破や遭難による偶然の漂着は数えきれないほどあったに違いないと指摘している [Ferrell　1969: 13–15]。しかし，近代以前に外界とどれほどの交渉があったのかは明確にしえないし，またモノの伝播や受容は限られた接触によっても起こりうる。したがって，相対的な接触の頻度や密度が問題なのではなく，大文明との接触が，原住民社会の生産技術，社会制度，またイデオロギー的側面にどれほどの影響を与えたのかが問題となる。

しかし，記録の上で台湾が諸外国から注目されはじめたのは17世紀初頭で，17世紀

中頃からはポルトガル，スペイン，オランダなど西洋諸国や日本の倭寇が，鹿資源を求めてあい次いで来島するようになった［伊能　1902: 19–20］。その頃には，すでに原住民と鹿皮や鹿肉の交易を行なう漢人があった。1603年に書かれた『東蕃記』には，「山最宜鹿，儷儷俟俟，千百為群」とあり，また「漳泉之恵民克竜烈嶼諸粤」の民が瑪瑙，磁器，布，塩，銅，簪環の類をもって「鹿脯皮角」と交易に来ると記されている［中村　1953: 102］。その頃どれほどの漢人が台湾にいたか知ることはできないが，数千人の漢人移民がいたらしい［中村　1953: 102］。その中には，すでに原住民との間に交易を始めていた漢人がいたことは明らかである。しかし，史明が指摘しているように［史　1974: 50］，原住民は侵入者を容易に受け入れようとはせず，首狩りで抵抗し続けたため，漢人の本格的な入植は，国家を背景とした軍事力の後楯なしには不可能であったに違いない。

2•2.　オランダ占拠時代（1624-1661）

1624年艦隊を率いて，台湾を占拠したオランダは，安平に築いたゼーランディア城と，後に築いた台南のプロヴィデンチァ城を拠点に，鄭成功によってこの地から退去させられるまでの37年間，ここを統治したのである。オランダ人の記録によると［Campbell　1903: 36］，このとき25,000人の漢人（女，子どもを除く）が兵士として台湾に連れて来られたとある。しかし，オランダの台湾支配の目的は，バタビアを本拠地とした東インド会社の貿易上の利潤を求めることであり，政治的支配を目的としたものではなかった。そのことは，東インド会社がオランダ改革派教会の宣教師をして政務員を兼務せしめたことでも明らかであると中村孝志は指摘している［中村　1952: 1］。彼らにとっての最大の関心は，いかに多くの鹿を捕獲し，これを集め，また肥沃な田畑を開墾して，甘蔗や米の生産性を高めていくか，その結果として，いかに多額の利潤を貿易によって上げるかにあったのである。

オランダは，そのためにまず2つの事業に着手した。1つは不服従な原住民を彼らに服従させることであり，もう1つは高い生産技術をもった漢人を台湾に来住させて，開拓を進めることであった。第1の事業について，当時のオランダ東インド会社の収支記録を分析した中村は，支出の主要項目に，台湾の守備や不服従蕃社の“征伐”のための費用が含まれていたことを明らかにしている［中村　1964a: 72］。すなわち，この時軍事力による原住民社会への侵略が始まったのである。そして，この地域の原住民族を帰順させ，他方でその資源の開発に乗り出した。しかし，オランダは，宣教師

による原住民の教化や教育にも力を入れ，撫墾策を取っていた [伊能　1904: 4–15; 中村　1952 など]。

第2の事業に関しては，オランダは福建の漢人に農業移民として台湾への移住を奨励した。そして，入植した漢人を原住民の攻撃から守り，原住民から土地を購買する権利を与えたり，会社の土地を開墾させたりした。1630年代には，福建地方での争乱や飢餓のため，台湾に流入する者も多くなり，漢人人口は急速に増加していったのである [伊能　1902: 28; 中村　1964b: 2][5]。

オランダが台湾において最も繁栄を極めた時期（1630-50年頃），入植していた漢人はどれほどの数であったのだろうか。伊能によれば，当時，台南地方に居住していた漢人は25,000戸から30,000戸，その人口は100,000人と推測される [伊能　1902: 26]。他方，中村は，1647年頃には冬季鰮漁業に従事する季節漁民1,400～1,500人を加えても常住していた漢人は約12,000人，このほかに婦女子500人以上，小児1,000人以上，これらに会社の支配下にあった壮丁20,000人（その多くは農業に従事），総計して3万数千人に達するが，しかし，なお多くの漢人が流入しているとオランダ資料は報じていると指摘している [中村　1964b: 2]。伊能が依拠した資料は明らかでないが，中村が渉猟したオランダ資料は，人頭税の納付者数を基礎にしたものであるから[6]，多少とも会社が直接把握していた漢人人口であったと思われる。伊能が推測した100,000人とはかなりの隔たりがあるが，オランダ植民地政府による中央集権が確立されていない状況下で，その数を正確に把握していなかったのである。当時，台湾に駐在したオランダ人は官民600人，守兵2,200人 [伊能　1902: 26] と，その数は非常に少ない。

その頃台湾をすでに占拠していた原住民の数は，どれほどであったのだろうか。オランダは1647-56年にかけて，数度の戸口調査を行なっている。中村によれば，その調査が局部的であった年も，また全島にかけて行なわれた年もあり，さらに間接的な聞き取りによる推定も含まれているが，およその見当はつけられるという [中村　1936]。もちろん未帰順の原住民については，聞き取りにすぎなかったであろうし，未知の村も多くあった。こうした限界を考慮して，1650年（永暦4年）の全島調査では，315

5) 1636年，オランダが台湾経営の基礎固めを終え，繁栄期にさしかかったとき，大陸では清朝が興った。そして，清朝の南進に伴って，南部ではあちこちに戦乱が起きた。さらにあい次ぐ飢饉に見舞われ，困窮した住民が台湾に難を避けてやって来た [伊能　1902: 28]。

6) 中村によると，オランダ東インド会社は，バタビアの植民地制度に倣って，すべての村落に在住する漢人を3カ月ごとにゼーランディア城に出頭せしめて許可証を更新させ，それによって人頭税を納入させていた。そして，この人頭税は，地場諸税の中で全体の5，6割を占める重要な財源であった [中村　1964b: 1–2]。また伊能によると，この税は7才以上のすべての人に課せられていたという [伊能　1902: 29]。

っ村，15,249戸，68,657人となている[7]。これを上記の外国人居住者の人口と比較すると，中村によるその最少推定漢人人口をとっても，オランダ人の支配が直接，間接におよんだ原住民と漢人の人口比は，2：1という計算になる。これら漢人の入植者の多くは西南部の限られた地域に居住していたとしても，これはかなりの人口圧で，その入植地の最前線近くでは，原住民は同化か後退かの選択を迫られていたことは想像にかたくない。

2•3.　鄭氏時代（1661-1683）

オランダ統治に代って台湾を支配した鄭氏一族は，農業開拓を最優先政策として，未開拓地域（「蕃地」と称された）の開発に乗り出した。彼らもまた，一方で抵抗する原住民を武力で討伐しながら，他方で彼らの漢人社会への同化策を採った［伊能 1904: 66-65］。

このとき，大陸の清朝は，鄭政権を孤立させるために，福建，広東，浙江からの渡台を禁じる政策を採っていた。しかし，鄭氏の積極的な開拓民の受け入れに呼応して，密かに来住する者も多くいたといわれている[8]。オランダ当時鹿皮と共に砂糖が輸出品となるほどに，甘蔗の栽培が伸びたが，鄭氏時代には米も輸出されはじめた［伊能 1965b: 613-614］。この事実は，開拓が急速に進んだことを証している。鄭氏父子三代23年間に，オランダ時代の漢人の集中地鳳山から，南へは恒春，北へは嘉義，彰化，新竹，さらに台北の一部の蕃地にまで開拓が進められていったのである［伊能 1965c: 274］。しかし，漢人の拓殖は，海岸や河川の港から上陸し，前進していったようで，図2に見るように，その進出は海岸平野部に限られていた。鄭氏時代すでに，鳳山方面の山地「傀儡蕃」（パイワン族とルカイ族の一部を含む）や南部恒春の原住民（たぶんパイワン族）の“討伐”を行なっている事実は，南部では山脚地帯の原住民の占拠地にまで進入を試みたことを裏づけている。

鄭氏末期の漢人の戸口は，およそ，3万戸，15万人と推定されている［伊能　1965c: 275］。オランダ時代からおよそ数万人の増加である。また，これらの新来住者の多くは男性壮青年層で，結婚相手が少なかったことが，深刻な社会問題を引き起こし［中村　1936: 118］，恒春あたりでは，原住民の女性と結婚し，開拓を進めていた漢人も

7）中村は全島を4区に分けて概略を掲載している［中村　1936: 58］。すなわち，北部集会区，南部集会区，淡水地方区，そして卑南覓地方区（東部）であって，前の2集会区が西部平野を含む地域である。なお，東部61村のうち27村は「推定」と書かれている。

8）オランダ人と貿易に従事していた鄭芝龍は，漢人を移住させることに協力し，移住者には毎人3金1牛を与えて数万にも及ぶ閩の饑民を台湾に移住させ，荒地を開拓させた［伊能　1902: 159］。

少なくなかった [伊能　1902: 108]。

2•4.　清朝時代（1684-1895）

鄭氏を征服し，台湾を福建省の管轄下においた清朝政府は，移住民が増加して，大陸の脅威となることを恐れ，引き続き渡台を禁じる政策を採った。そして，貿易に従事する者に対しては，厳重な検査の上，許可書が与えられた。しかし，大陸での戦乱や飢饉のため，多くの貧民が農業開拓民として渡台し，その禁令は空文同然であった。その結果，漢人人口は増加し続けていた [伊能　1902: 160–161]。その後も漢人の台湾移住の勢いを止めることができず，政府は1760年（乾隆25年）ついにこの禁令を廃止した。しかし，その間数回にわたって移住の禁を強めたり，緩めたり，その対応に苦慮している[9)]。

清朝時代の漢人人口について，伊能は文献資料を基礎に詳細に分析している [伊能 1965b:233–242]。以下これを要約すると，清朝の戸口調査の制度が台湾においても適用され，「一定の室家ある者に限り」これを対象に，5年ごとに調査を行なうことになっていた。そして，「客戸流寓並単丁（独身）」は除外された。最初の調査は，清朝の台湾領有当初の1684年（康熙23年）で，12,727戸，16,820人であった。1691年（康熙30年）には「戸数同前，人口630人増加」とあり以後，5年ごとの調査では，「戸数同前」，人口は増加分だけ記載されている。1711年（康熙50年）には戸数に変化なく，人口18,827人を数えている。以後この年の戸口数を常額とし，これが賦役の課せられていた公認の数とされたのである。当時も流民，欺隠の民も非常に多く，実数を把握することは困難で，精密な調査は行なわれなかった。実際はこの数をはるかに上回っていたに違いない。伊能は10数倍にも及んだのではないかと推定している [伊能 1965b: 235]。

その後1世紀を経て，1811年（嘉慶16年）の調査では，241,217戸，2,003,861人とされ，この間の人口増加は顕著である。これは，1760年（乾隆25年）「渡台の禁」が解かれたことによるものであろう。続いて台湾が福建から独立して1省となった1887年（光緒13年）に行なわれた調査では，507,105戸，2,545,731人とある。さらに，1905年（明治38年），日本領有後の最初の戸口調査によれば，漢人人口は2,979,016人で，清代の調査が正確性を欠いていたことを考慮しても，依然増加し続ける漢人人口の実態を示している。したがって，清朝の台湾領有当初の人口を15万人と想定すると，約

9) 最初の渡航禁制は1684年に出された。1732年には禁を弛めたが，1740年に再び禁止した。しかし1745年，再度禁を弛め，1747年にはまた禁止，そして1760年にようやく禁を解いた。その後禁令が敷かれることはなかった [伊能　1902: 168–170]。

200年余りの間に，その人口は20倍も増加したことになる。他方，原住民の人口は，減少はしても増加することは考えられない。1886年（光緒12年），社商または通事からの聴取に基づいた調査として報告されているところによれば，熟蕃の人口は148,479人［伊能　1965b: 242］となっている。これに大正9年（1920年）第1回国勢調査に基づく生蕃の人口約15万人を加えると（大きな人口増減がなかったと仮定して），およそ原住民は漢人の1割ということになる。つまり清朝200年間に原住民と漢人入植者との人口比率は，逆転してしまったのである。こうした爆発的な人口増加は，主として漢人の入植者数の増加によるが，農作物の増産による自然増加や，原住民との婚姻（法制上は禁止されていた[10]），また原住民の漢化による漢人人口への編入なども，その要因であったと考えられる。

伊能は清代における漢人の開拓を4期に分けて，地域を示しているが（図2参照），それぞれの時代の主要開拓地を挙げておこう。第1期，すなわち康熙・雍正年間には台西平原2地域が開拓された。1つは，閩人による台北平原であり，いま1つは粤人による下淡水渓流域平原であった。第2期，すなわち渡台が解禁になり，漢人人口が著しく増加した乾隆年間には，台北平原から，さらに東部の宜蘭平原のカバラン居住地域に及び〈本誌所収の清水論文参照〉，台北平原を貫流する淡水河の河口には貿易港八里分口が開かれた。続く第3期の嘉慶・咸豊年間になると，山間盆地の埔里の原住民居住地区を侵略，激しい抗争の末，ここに市街地が形成されるに至ったのである。最後の第4期，つまり同治年間には，台東平原への入植が始まった。それ以前にも漢人はすでに台東地方に往来し，交易に従事していたが，永住する者はいなかった。こうして，清代末までに，山地原住民の居住地以外のほぼ全域に漢人の拓殖が進んだのである［伊能　1965b: 160–178］。

こうした拓殖は，随所で漢人と原住民の抗争を引き起こしたのは当然のことである。18世紀初頭には，南部においては，山麓地帯にまで漢人が進出したことが，文献上明らかである。「……此より前，大山の麓人敢えて近づくなく，以為く，野蕃殺を嗜むと，今や群りて深山に入り，蕃地を雑耕し，殺さるると雖も畏れず，甚だしきは傀儡内山・台湾山後の蛤仔難，崇爻・卑南覓等の社に至るまで，亦漢人の敢て其地に至りて，此と貿易するあり，生聚日に繁く，漸く廓く，漸く遠し，禁を励ますと雖も，止めしむること能はざるなり［伊能　1965c: 304］」という状況であった。そして，開拓が禁止されていた地域にまで及んだため，政府は治安維持に苦慮し，1729年（雍正

10）民蕃結婚禁止は大陸における漢人と苗族との結婚を禁止する法令，すなわち「民苗結親令」に準じて規定された。しかし，現実には，これを禁止することは困難な情況で，官吏もこれを黙認せざるをえなかった［伊能　1904: 563–565］。

7年）蕃界への進入を禁止したが，それにもかかわらず漢人は蕃界を開拓し，交易も行なっていた。たび重なる禁令や防隘の制度も守られず，治安は悪化していった。原住民に対する同化や隔離政策も非常に消極的なものでしかなかった。特に19世紀に入ると官吏の腐敗は著しく，原住民政策にまで及ばなかった[11]ようである［伊能 1965c: 472–478, 1965a: 758–771］。こうした清代の情況を考慮するなら，漢人と原住民との間で密かに行なわれていた交易は，かなり小規模なものであったと思われる。次章で改めて，この交易の問題を取り上げる。

3. 漢人と原住民との交易

渡台した漢人の多くは農業移民であったが，『台湾府志』に見えるように，プロヴィンチアやゼーランディア（後の赤嵌樓）両城外には市場が立ち，オランダ領有当時，すでに商業の発達を無視することはできないほどであったと，伊能は指摘している［伊能 1965c: 1］。漢人と平地原住民族との間の交易については，一方では政府に公認された制度的機構がありながら，他方では非公認の商人に委ねられていて，これを監督する立場にあった官吏も，違法や違反を厳しく取り締ることはしなかったのである［伊能 1965c: 14］。山地原住民との交易は，まさにこうした非公認の商人によって行なわれることが多かったと考えられる。また，漢人の進出による平地原住民の漢化や山脚地帯への移住が進むにつれて，彼らの山地原住民への接触を容易にしたであろう。以下，どのような制度のもとで，どのような品物が，どのような経路で流れていたかについて，まとめてみる。

3•1. 交易制度

オランダは，貿易品として一番重要な台湾特産の鹿皮や籐を原住民から集めるために，朕社の制度をとった。この制度は，東インド会社の厳格な監督のもとに，朕社（すなわち委託された村落請負い）の商人（「社商」）にこれらの貨物の集積を委託す

11）「各省吏治の壊（あしき）は閩に至りて極まり，閩中吏治の壊は台湾に至りて極まる。然れどもなおこれ民なり，なおこれ官なり。あに（豈）それ治むべきの民無く，用ふべきの官無くして，卒に手を束ねて策無きに至る者ならんや。」と道光年代に書かれた文章に記されているように［伊能 1965a: 769］，福建から送られてくる官吏の無責任と腐敗が，反乱の原因となっていた。そうした情況が，台湾では「三年小反，五年大反」の諺で表現され，土匪の反乱が絶えなかった。1721年（康熙60年）朱一貫の乱の後，保甲制度を施行し，住民に治安維持，戸籍，収税などの任務に当らせたが，徹底されず，有名無実の状態となっていた［伊能 1965a: 758–771］。

るというものであった。委託された社商は漢人で，彼らは特許を与えられて原住民との交易に従事し，賸税，すなわち交易税を会社に支払っていた。また，原住民との交易には，金銭は用いられず，社商は原住民の欲する物品と交換していたのである [伊能　1904: 38–39]。原住民が入手した物品については後述するが，こうした物々交換による交易は清朝においても行なわれ，原住民の間に貨幣経済が導入されたのは，少なくとも日本の台湾領有以後のことである。

また，漢人と原住民の争いを防ぎ，交易が進められていくためにも，原住民を会社の支配下に置くことが必要であった。オランダ人の記録には，当時原住民の村には，首長のような政治的指導者は存在しなかった [Campbell　1903: 18]。そこで会社は，帰順した村の長老の中から首長を選び，彼らに村人を監督させ，官命を布告させ，その代償として彼らに衣服や籐杖，織布などを与えた [Campbell　1930]。さらに，会社は1645年，帰順していた原住民の村の首長を招集して，評議会を組織し，毎年1回これを開くこととした。この評議会の際，会社への忠誠と義務を果たすこととを誓わせ，種々のモノを与え，盛大な宴を設けて首長たちをもてなした [伊能　1904: 35]。これも外来品が原住民の手に渡ったもう1つの経路であった。ただこうした制度が世襲首長制の形成の契機になったのか，また与えられたモノが権威の象徴となったのかは別に検討を必要とする（後述）。

ここでスペインの台湾占拠について触れておかねばならない。台湾北部の基隆地方は，一時期（1626-42年）スペインによって占拠された[12)]。スペイン人は，基隆に築城し，周辺の原住民を帰順させ，漢人と共に硫黄の採掘に従事させたり，また基隆港に貿易に来た漢人に，原住民から集積した鹿皮や籐，硫黄などを売っていた [伊能 1904: 53]。当時この地域での原住民と漢人の交易の実態の一例を，伊能はスペイン宣教師の報告文から引用している。

「キマゾン（基隆渓）の本渓より一支流あり。これに沿うてキバタオの部落にたっすべし八九の部落に分れ，多く硫黄を産出す。冒険なる支那人はこの地に入りて来たり土蕃に毛氈類及び装飾用の瑪瑙珠，手釧，鈴の属を与えて，硫黄と交換し，百斤の価，およそ五両甚だしきは一七両にて支那本土に売り出し，而してその土蕃よりこれを得るには五百七十斤の硫黄に対して，わずかに一枚の氈を与うるに過ぎず。その他鹿皮，及び籐も重なる貿易品とし，中には狡獪なる支那人

12) フィリピン群島を植民地支配していたスペインは，1626年台湾の東海岸を北上し，三貂角から基隆港に達し，ここを占拠した。しかし，これに反撥したオランダは1642年彼らを台湾から追放した。スペイン人もまた貿易と天主教の布教に努めたが，わずか16年の占拠でその影響に見るべきものはなかった [伊能　1904: 51–53]。

が粗造の偽品を以て，土蕃を欺き，利を貪らんとするもありき。又淡水港口に近きセナァ (Senah) の蕃地には，夥しきマングローヴを産し，支那人はこれを貿易し，その皮百斤を四両にて支那本土に搬入せり [伊能　1904: 54–55]。」

鄭氏時代にも朕社の制度が踏襲され，社商に鹿皮の各種を徴収させた[13]。鄭氏もまた原住民に対して撫墾策をとり，帰順した原住民には[14]各社（村）に土官を置き，その蕃社の頭人として，服従を誓わせていた。そして，銀碑，袍帽，靴，煙草，布などを与えていた [伊能　1965c: 425–426]。

さらに，清代においてもこの制度を踏襲し，漢人の社商が交易に当たり，帰順した蕃社には，統治役として土官を置いた。この土官は「土目」（後に頭目）と称された。彼らには報酬として若干の煙草，布，砂糖等が与えられた。また，蕃地に出入りして原住民と交渉する者を「社棍」，土蕃と漢民族の仲介をする者を「蕃割」，官の命令に従って統治するものを「通事」と称した。通事は地方の行政官であった [伊能　1965c: 426–427]。通事の中には原住民の言葉に通じていた者もいて，原住民との交渉に重要な役割を果たしたようである。例えば，康熙32年（1693年）頃には，こうした通事を介して，阿里山の山中の原住民の村に，朕社の商人が毎年小舟を用いて往来し，布，煙草，塩，砂糖，鍋，釜，農具を満載して行って，これらを鹿肉や鹿皮と交換していた [伊能　1965c: 327]。

しかし，前述したように，清代には官僚の風紀が乱れ，この地方官僚組織は十分機能せず，不公正な取り引きも横行していた。

「社商……工本を出資して，蕃地を朕耕し，かつ番人と貿易し，これが代償として蕃課の包弁をなすにあり、しかもその下に社丁(即ち社棍，俗に蕃割と呼ぶ)あり，社寮を蕃界に設けて，常に蕃人との交渉に当り，およそ蕃貨貿易の利益は，挙げてかれらの壟断に帰するの姿を致し，加うるに通事はその背後の股肱たるの位地を占め，公然として私嚢を肥やすを得たり。否しばしば通事の手に社商の事を行うの特例すら，黙認せらるるの実ありたりき。此等の通事及び社商社丁等は，当初地を限りて帰附熟化の蕃界にのみ出入したりしが，漸次に生蕃の区域に及び

13) 中村は，台湾産の鹿の種類について，往時日本に送られてきた大鹿は水鹿 *Cervus* (*Rusa*) *unicolor* Swinhoii (Sclater)，小鹿は，キョン *Munticus reevessi micrurus* (Sclater)，その他タイワン鹿は現在ほとんど絶滅に瀕した花鹿 *Cervus* (*Sika*) *taiouanus* Blyth であろうとしている [中村 1953: 111–112]。また，濫獲によって鹿が激減し，1640年から3年間その保護に努めた [中村 1953: 116–117]。

14) 熟蕃たる要件としては，i) 官府に対して柔順なること，ii) 官府に租税を納付すること，iii) 公役に服すること，そしてその公役とは (a) 公文の逓送 (b) 文武官のための輿籠や荷物運びの労役 (c) 舟船の牽挽，などであった [伊能　1965c: 433–435]。

たりしは事実にして，ために蕃界の滋事を誘く情弊また甚だしきものありしが如し [伊能　1965c: 435]。」

ともあれ制度上は，オランダ時代から清代末まで一貫して漢人の社商に原住民との交易が委ねられていたのである。

3•2.　鹿　皮　交　易

原住民との交易の最大の目的は，鹿皮の集積にあったので，ここで鹿皮交易について，まとめておきたい。最初に引用したように（2.1参照），17世紀以前すでに漢人が磁器，布，塩，銅，装身具（簪環）などをもって，鹿の肉や角と交換にやって来ていたことが記されている。しかし，平地原住民の中にかなりの外来品が流れ込んだのは，オランダの鹿皮貿易がその契機になったことは，多くの研究者が認める事実である。当時，社商の活動舞台は，まだ台南から鳳山にかけての原住民地域であったと推測さ

表1　台湾産皮革舶載表（オランダ船による）[中村　1953: 119]

年　次	各　種　鹿　皮	大　鹿　皮	山羊皮	獐　皮
	枚	枚	枚	枚
1634	111,840			
1638	151,400	5,116(斤)		
1641	51,060*			
1642	19,140＋A	1,150	1,330	
1643	61,580	3,212(斤)＋A	550	
1644	39,020	41,547(斤)	1,764	
1649	27,250＋A			
1650	82,874			
1651	43,530	400		1,010
1652	91,572	6,920(26,360斤)		
1653	54,700	2,000		
1654	27,240	4,880		
1655	103,660	8,000(31,995斤)	1,274	450
1656	73,022（含大鹿，山羊）			
1657	60,344	5,336	3,443 (含コルトバン)	
1658	94,474	6,380	4,937	
1659	73,110		15,400	
1660	64,898（含大鹿）			
1661		2,180	600	

* なほこの年官人一官の持来つた臺灣鹿皮2,050枚あり

備考　各種鹿皮の内には大鹿皮，山羊皮，獐皮等を含めたものもあり得る。
尚この表以外の年次でもかなりの臺灣鹿皮類の舶載を見て居るが，数量不明のものは原則として除外した.

れる。また，未帰順の原住民領地にもすでに帰順した原住民を仲介として，鹿皮の集積が行なわれていたであろう。それは，当時の鹿皮の産出量によって推測される。しかし，山地原住民にはその影響が，いまだ及ばなかったと考えてよい。

オランダの鹿皮貿易を詳細に研究した中村によれば，台湾占拠の年，すでに日本に向けて1万8千万枚の鹿皮が積み出されており，その翌年には2万枚（別の資料では20万枚）とも数えられる鹿皮が集積されていた [中村　1953: 104, 106]。正確な年次産額はわからないが，中村は大体毎年10万枚前後と推定している [中村　1946c: 69]。また，産出量の明確にできるものとして，彼がリストしているだけでも，1634年から1660年にかけての26年間に123万枚をはるかに越えている。（表1参照）・

当時，原住民はまだ弓矢，槍，わなを用いて狩猟を行なっていた [Campbell　1903: 13]。オランダは，原住民に狩猟具を与えて，捕獲量の増加を図った [中村　1964c: 70]。しかし，どのような狩猟具が与えられたのか明らかでない。ただ，1628年に荷揚げされた貨物の中に，多量の刀，銃，矛，刃物 (soap-knives) が含まれていた [Campbell　1903: 40] ことは注目すべきである。また，会社は漢人にも自ら蕃界に入って狩猟を行なうことを許可していた。そして，彼らは進歩したわなを仕掛け，原住民に比して，はるかに大量の鹿を捕獲したのである。こうした乱獲が1630年後半になって，資源の枯渇を招き，一時禁猟にもなった [伊能　1904: 38–39]。オランダ時代の莫大な鹿捕獲量のうち，原住民の捕獲した鹿が，どれほどの割合を占めていたのかわからない。しかし，当時の漢人人口から推察して，原住民の貢献と，それによって彼らが入手した外来品の量は無視できないであろう。

3•3.　山地原住民への外来品の流れ

清代乾隆年間（18世紀中葉）に入ると，漢人の拓殖が山脚地帯にまで進み，また平地原住民も漢人に圧され，漢化されながら，居住地を山脚地帯にまで移して来ていた。原住民との接触の機会が拡大されていったことはすでに明らかである。そうした情況の中で，漢人や漢化された原住民が，小規模であっても，行政地区の境界を越えて，交易を行なったり，また逆に山地原住民が塩や農具など生活必需品を求めて，平地に出てくることもあった。こうした交易は互いにかなりの危険を伴っていた。しかしそれ以前，18世紀初頭には，漢人は，こうした危険を顧みず，すでに交易を行なっていたことを伊能はさまざまな歴史資料から明らかにしている [伊能　1965c: 304–328]。例えば，

「康熙三十二年，陳文・林侃等の商舶風に遭ひ，其處に飄ひ至るあり，住居年

を經，略々蕃語を知り，始めて能く其港道を悉せり，爰に於て雞籠の大通事頼科・潘冬等前往招撫し，遂に皆化に嚮ひ阿里山に附し餉を輸す，毎歳朕社の人小舟を用ひ，布烟鹽糖鍋釜農具を裝載して往き，與に貿易す，蕃は鹿脯筋皮を以て之を市る，皆物を以て物と交し，銀錢を用ひず，一年に止々一往返するのみと云（紀臺湾山後崇爻八社）[伊能　1965c: 327–328]。」

他方，原住民も自ら，山脚地帯に現われ，彼らの必要とする物を漢人や平地原住民との交易によって入手していたようである。例えば，阿里山中にある崇爻八社（ツォウ族の村）から，夏，秋に未帰順の原住民が独木舟で，土産の鹿肉，通草水，籐などを載せてやってきて，近社のあたりで漢人と交易を行なったことが記されている [伊能　1965c: 327–328]。また，西南部の鳳山山脚地帯では，原住民が山から降りて来て，火を焚き，その煙を合図に交易を行なったという記録を読んだことがあるが，今その出典を探し出せないでいる。しかし，こうした交易の実態を知る資料は少なく，今後の課題としておきたい。

さらに，山地へのモノの流通を考える上で重要なのは，原住民と漢人との婚姻である。原住民と外来者との結婚は，すでにオランダ支配の時代に行なわれていたが[15]，鄭氏時代から清代にもこの慣行は継承された。清代初期には，「主に熟蕃に対して行われていたが，後に生蕃の間にまで及んだ [伊能　1918: 24]」ようである。社商や通事の中にも原住民の女性を妻や妾とした者が多かった。『台湾府志』には「近日，蕃女の漢人牽手する者多く，（中略）媒酌聘取し，文また煩を加えり（南路鳳山熟蕃）。帰化の蕃女，また漢人と妻室をなす者あり，往来倍々親密なり（南路鳳山傀儡蕃）。瑯嶠の一社は，漢人と婚をなすを喜び，青布四匹，小鉄鐺一口，米，珠，觔許をもって聘となす。期に臨み，牲醪を備へ，これを所親および仕官に白し，婚を成す。（南路鳳山瑯嶠番）[伊能　1918: 23–24]」という状況であった。（なお瑯嶠は恒春の旧名でここの住民はパイワン族である。）

伊能は，また，平地原住民社会の多くは漢化以前には母系制社会ではなかったかと考えられるという。その根拠は，「蕃俗，女をもって家を承く，およそ家務は，ことごとく女をもって主とす（『蕃社采風図考』の〈耕田〉）」という記述で，この説明には，いくぶん疑問が残り，漢人男性は婿として家に入り，家務を左右する便宜を得たことは事実のようである。そして，頭目を世襲する家格のある女子と結婚した場合に

15）原住民女性と外来者の結婚は，すでにオランダ時代に，「宣教師は伝道を終生の業となし，当地の女子と結婚し，ここに永住の計をなさんことは，最も望む所」という宣教師カンデヴウスの意見に明らかである [伊能　1918: 23; Campbell　1903: 25]。彼らもまた貿易と天主教の布教につとめたが，わずか16年の占拠でその影響に見るべきものはなかった [伊能　1904: 51–53]。

は，頭目の権能を行使することができたので，しばしば利欲を目的に自ら進んで蕃婦と結婚したと記されている [伊能　1918: 24]。

男側から女側に渡された婚資として，青色の布，小さい鉄鍋，米，珠などが用いられていたことは，上の記述で明らかである。また，富める者と貧しい者とでは，その量的差違は大きかったであろうが，前者は7，8枚のスカート，漢人の衣服，3，4百個の腕輪（竹製），10～20個の指輪（鹿の角製または，金属製），布など，また貧しい者は，竹製の腕輪と3枚のスカートという記述もある [CAMPBELL　1903: 18]。

平地人と山地人との結婚は，単に婚資として外来品が山地に入っただけでなく，入り婿としての漢人が，非公式に交易に大きな役割を果たしていたことは疑いを入れない。

3•4.　山地へ流入した交易品

すでにどのような経路を通って，交易品が原住民社会に流入したかを述べてきたが，ここで南部山地を占拠してきたパイワン族を中心に，外界から流入した交易品を整理しておきたい。

漢人が山地にもたらした交易品の多くは，農作物と塩を除いて，多くのモノが大陸から輸入されていた（表2参照）。そのことは，『台湾府志』にも明らかである。すなわちそこには，「漳州から絲線，漳紗剪絨，紙料，煙草，布，蓆草，甎瓦，小杉料，鼎鐺，雨傘，柑柚，青果，橘餅，柿餅，また泉州から磁器，紙張，興化から杉板，甎瓦，福州から大小杉料，乾筍，香菰，建寧から茶を載せて来た。帰りには，米，麦，菽豆，黒白糖，餳，蕃薯，鹿肉を積んだ [蔣英他〔編〕　1985: 2257–2258]」と記されている。このほかにも農具や刃物，鍋，釜，銃などの鉄製品，また金，銀，珠など

表2　三効輸出入貨物　[台湾銀行経済研究室〔編〕　1957: 82]

郊＼貨物	輸出貨物	輸入貨物
北郊	白糖，鹿肉，姜黄，樟脳，硫黄，煤炭	綢緞，火腿，羅紗，絹布，紡葛，絲線，棉花，藥材及天津烟臺上海的雑貨，紹興酒
南郊	苧，青糖，豆，魚膠，麻，魚翅，菁子，豆餅，米，牛角骨，乾笋	福州漳州生厚煙，泉州棉布，漳州藥材，泉州磁器，永春葛，龍巖紙，漳州條絲煙，漳州絲線，福州漳州杉木，泉州深滬鹽魚，香港咔咽，漳州雑貨洋布，廣東雑貨鴉片，漳州泉州磚瓦及雑貨
港郊	豆餅，乾笋，豆，麻，米，菁子，青糖，麥	豆餅，乾笋，豆，麻，紙，菁子，米，麥，青糖

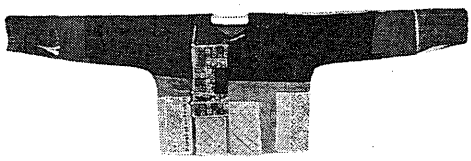
録自臺南州共榮會編「南部臺灣誌」。其中港郊的輸出入貨物幾乎完全相同，未知何故。

の装身具には，オランダ人や漢人が貿易によって，周辺地域から得たものも含まれていたであろう。ここでは，日本領有当時，パイワン族が保有していた主な外来品を検討し，彼らの社会生活に与えた影響について考察したい。これらの外来品の多くは，同じく首長制をもつプユマ族やルカイ族に共通するが，ここではそれらとの比較には言及しないことにする。

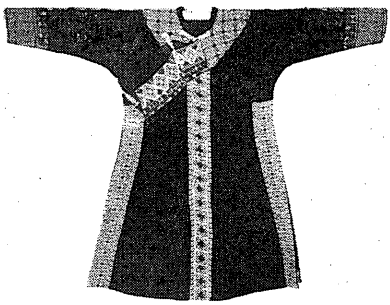
a）衣服

木綿布が貨幣に代わるものとして交易に用いられていたことは，すでに述べたように明らかである。日本統治の時期には，平地から入手した無地の木綿布が，ヤミ族を除くすべての原住民の衣服に用いられていた。これまで伝統的なパイワン族の衣服として収集されてきたものは，青または黒地の木綿の布を用い，漢人の衣服に似たものである。（写真1参照）また，木綿布だけでなく儒子やベルベットもわずかながら用いられていた。

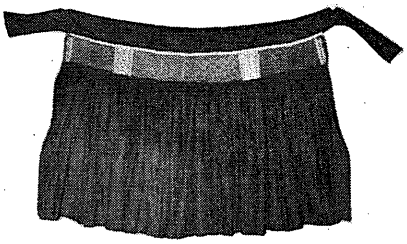
すべての台湾原住民のもとで伝えられてきた後帯機による機織りや，こうした織布で作った直線裁断の貫頭衣あるいは袈裟衣（貫頭衣に筒袖が付いた衣服）や女性の腰



a．男子上衣 “iton”



b．女性上衣 “ronpaw”



c．男性短袴 “tsebut”

d．女性長袴 “kown”

写真1　パイワン男女衣服 ［国立民族学博物館所蔵標本〔松澤員子撮影〕］

a．男子便服

b．男子官吏上衣

図3　清代官吏衣服［上海市戯曲学校中国服装史研究組〔編著〕 1984: 190–191]

巻きは，彼らの伝統的衣服であり，かなり古くから伝えられてきたと思われる。また繊維としては苧麻が利用され，山地ではこれを近年まで栽培していた。しかし，機織りの技術や苧麻の栽培がいつ頃から始まったのかは不明である[16]。木綿布が交易品と

16) 岡村と張は，台湾原住民は獣皮と樹皮を叩いて作る不織布が古い衣服で，機織はその後に導入されたのではないかと考えている。ただ，機織もかなり古くからあったようで，パイワン族やピューマ族では山野に自生するヤナギイチゴ (*Dedregeasia Webb*) の樹皮より得た繊維を撚って，織布を作る。これは台湾で独自に発生した文化かもしれないが，大陸系文化の一部が台湾に残されているとも考えられるという。また，山地で一般に用いられてきた苧麻は，蘭嶼以外では自生せず，栽培されたものであるから，これも後に受容されたものであると考えている［岡村・張　1968: 14–17]。なお，『台湾府志』に，「棉布，苧布，麻布（以上三種俱不多産）卓戈文(番所織氈也)毛被（俱番婦剝樹皮和獣毛織成），達戈紋（番所織布名以苧為之番毯），（以上四種俱詳番俗）以上幣之属［蔣英他〔編〕 1985: 2259]」とある。筆者（松澤）は，こうした機織技術がオランダ以後に受容されたものではないと推測している。また，原住民の伝統的な染色技術については，岡村と張の説明を参照されたい［岡村・張　1968:18]。

して入る以前には，こうした織布や鹿，山羊，羌などの獣皮が一般的な衣服であったに違いない。

また，『台湾府志』の諸羅縣の原住民（たぶんシラヤ族）について記された部分に「蕃婦は自ら狗の毛や苧麻で布を織る。糸は茜草で染め，目を奪うような文様を織り出す。これを達戈紋という［蔣英他〔編〕 1985: 2259］」とある。今日我々の知る優美で精緻な伝統的パイワン族の織布技術が，平地原住民から伝えられたのかどうか，平地原住民の織布がほとんど残されていないのではっきりしないが，こうした手のこんだ織布は貨幣として，また特定の階層に用いられたに違いない。そのことは漢籍に，鳳山県山猪毛等（帰化社）〔山脚地帯のパイワン族――筆者注〕の習俗として，「男女披髪裸身，或いは鹿皮で体を蔽う。富者は偶く蕃錦，咬の属を用う。能く樹皮を績いで布と為す［岡村・張　1968: 16］」とあることからも窺い知ることができる。

平地から織布や色糸，色毛糸が入り，また刺繍の技術や，漢人服のスタイルが伝わると，こうした外来品や技術を用いて作った衣服は，首長やその家族という特権階級にのみ着用が許された。一般平民が，平地から入手した無地の木綿布を用いて，首長の衣服と同じスタイルのものを着用するようになったのは，比較的新しいことなのかもしれない。それは，清代の中期になって，平地部での漢人の開拓が進み，交易品としての鹿が山地に求められなければならなくなって，相当量の木綿布が流入した頃からと思われるからである。ここで注目しておきたいことは，外来品である布や糸を用いてあることや漢人服スタイルが，首長の権威の象徴になったのではなく，それにつけられた文様（百歩蛇や人頭など）が権威の象徴として用いられていた事実である[17]。この百歩蛇や人頭の文様が平地の原住民の間にも用いられていたのかどうか，今は知る手掛かりがない。しかし，少なくともそれが漢人文化の影響でないことだけは明白である。

b）服飾品

パイワン族の間で，服飾品として最も高価と考えられているものにガラス玉があり，首飾りとして着用される。このガラス玉が，交易品として流入したのか，彼らの祖先が持ち込んだのかは，意見の分かれるところである［Chen　1968: 357–366; 宮本 1957 参照］。この種のガラス玉は，主としてパイワン，ルカイ，ピユマの 3 種族の間に流布しており，他にはあまり見られない。交易品として漢籍にしばしば現れる「珠」が，このガラス玉を意味しているのかどうかも確かでない。宮本は「各色贋珠」（『諸

17）パイワン族の首長家では，家屋の柱や梁，首長やその家族の用いる匙，枕，椅子，きせる（煙管），木製の桶や箱（呪具を入れる），櫛などに百歩蛇や菱型のうろこ文様，また人像や人頭が彫刻されていた。

羅縣志』）とあるのはおそらくこのガラス玉であろうという。そして，明末から清朝初めには彼らの間に服飾品として用いられていたが，その後長年の交易において徐々にその数が増えたのであろうと推察している［宮本　1957: 308］。このガラス玉には数多くの種類があるが，パイワン族に間で，最も貴重な玉は，*mulimulitan* と呼ばれるもので，これは古い首長家にしか見いだせない。また，その呪術的力が信じられ，祭祀（*paLisi*）の対象となっている。そのほかに，ビーズのような小形管玉があり（朱・黄・緑の三色），刺繍に使用された。しかし，これらの玉の入手経路が明らかにされないので，ここではこれ以上の議論は差し控えたい[18]。

ガラス玉のほかに，金，銀（銀貨），銅，アルミボタン，鈴，瑪瑙，子安貝や他の貝類，ビーズなどは明らかに交易によって平地から入手されたモノである。これらは，彼らの土産の猪や豚の牙，鷹の羽などと組合せて，頭飾り，たすき，胸当てなどに用いられ，また指輪や腕輪（銀，銅製が多い），首かざりなどとしても利用されている。そして，こうした交易品を所有していたのは，首長家であって，特に西南部の古い村々の首長家に多かったと伝えられている。これらの外来品は，首長の権威を誇示する役割りを果たしていたが，モノそれ自体に呪術的な力の信仰があったわけではない。

c）鉄製品

台湾原住民は製鉄，製銅の技術を知らなかったから，山刀，小刀，鍬，鎌，鍋（銅製もあり），やじり（鏃），銃，青銅柄付き短刀，その他の鉄製品は，すべて交易によって入手したモノである。また，鉄片を加工する簡単な技術はもっていたらしく，中部山地のカピヤン社でマレイ式フイゴがあったと伝え聞いたことがある。鉄製品は昔は大変貴重品であって，彼らの間での交換に貨幣の代わりとして，また婚資としても用いられていた。他の交易品と同様に，鉄製品も首長家では数多く所有していたと伝えられるが，山刀，小刀，鍋などは，一般平民家でも，いつの頃からか入手していたようである。これらの生活必需品は，かなり早くからパイワン族，特に西南山地の村々の中に入っていたのではないだろうか。

銃は，日本統治の頃には，ほぼ各世帯に1丁ぐらいずつ保有されていたようである［外務省条約局法規課　1964: 249–250］。また，『理蕃誌稿』によれば，原住民が銃を入手したのは乾隆中葉頃（18世紀後半）で，樟脳や籐を採集しに入山した漢人が，原住民との和睦のために，彼らの最も喜ぶ銃を与えたのではないかといわれている［台

18）北部のタイヤル族やサイシャト族，またブヌン族にもある程度，白い管玉が貴重品として，また祭祀の際の饌食として用いられていた。しかし，この管玉についてもその入手経路は明らかにされていない。

湾総督府警察本署　1918a: 314–317][19]。漢人との接触が早かった南部では，それより早い時期に流入したことも考えられる。それにしても短期間に多数の銃が原住民の手に渡ったことは，清代末期の漢人の蕃界への無法な資源開発と原住民の略奪によるのではなかろうか。

こうした鉄製品も社会階層によって，所有する量の相違はあっても，それ自体が権威の象徴でなかったことは注目してよいと思う。ただ，鉄には呪的な力があるという信仰は，パイワン族に一般的で，儀礼の際には，巫者が鉄粉を用いる。これは古くなった鉄鍋を叩いて粉にしたものである。鉄の呪力の信仰は，必ずしもオランダ以降の交易による鉄製品の入手と結びつけなくても，マレイ式ふいごの存在は，広くマレイ世界の鉄の呪力の信仰と文化的関係を示唆していないだろうか。

ここで首長家に神聖な家宝として伝えられてきた青銅柄付き短刀について触れておかねばならない。この青銅刀を研究した鹿野忠雄は，古い由緒ある村の首長家はどこでも保有していたという [鹿野　1946: 202]。しかし，これもまた流入経路については不明で，鹿野は，パイワン族が原住地で製作し，台湾渡来の際に携えてきたと考えるほうが，渡台後入手したと考えるより妥当であるとしている [鹿野　1946: 203–204]。そして，大陸のドンソン文化との関連を指摘している [鹿野　1946: 211–212]。いずれにしても，現在までこれを台湾の漢人から入手したという指摘はない。

d）陶磁器

パイワン族の首長家は，明らかに漢人から入手したとわかる陶磁器の壺と百歩蛇や花文様，また幾何学的な文様の付いた古壺を保有していた [宮原　1936; 任　1960 参照]。パイワン族は，これらの壺をその形や文様によって，それぞれに名称を与えている。漢人から入手した壺は，首長家だけでなく，どこの家でも所有しており，酒の醸造壺として，また水容器として生活必需品であったといわれている。また，婚資としても重要な品の１つであった。しかし，首長家の古壺は始祖からの伝来の物で，特に中部から北西部地域の首長家では，彼らの始祖誕生伝説と結びつけられて，伝承されている場合が多い。これらの神聖な古壺については，その由来伝来を明らかにすることはできない。

以上，パイワン族の取得した外来品と思われるものについて検討してきた。そこには１つの重要な特徴を見出すことができる。すなわち，これらの外来品の多くは首長家に集まっていて，平民家には量的に少ないことである。しかし，首長の権威の象徴

19) 樟や籐は甫里以南には少ない。特にタイヤル族の領域では，籐・樟の伐採に入ろうとする漢人とタイヤル族の間で殺傷が繰り返されたと報告されている [伊能　1904: 465–466]。

として，首長家にのみ代々継承されてきたこれらのモノが，いかなる経緯で首長家にもたらされたかという伝来時の事情についてはいずれも明らかではない。ただしパイワン族一般の間では，これらのモノの由来に関して，なにやら神秘的な故事が伝えられている。しかも，その多くは百歩蛇や人像の文様を有するもので，始祖伝説に関係している点が注目される。この文様は，彼らの木彫や石柱にも刻まれ，首長家にのみ使用が許されていることは，今さら言及するまでもない。ここでこれ以上この問題に立ち入ることはできないが，筆者としてはパイワン族の首長制は，始祖から初生子（男女にかかわらず）によって世襲される首長の呪術的力の信仰を基盤として，漢人との接触以前からすでに存在したのではないかと考えている。確かに外来品の取得は，首長家と平民家との経済的格差を増大し，そのことによって政治的権力もある程度強化されたに違いない。しかし，首長制自体は，それを契機に成立したとは考えにくい。この問題については，目下準備中の別稿で論じているので，その公刊を待ちたい。

4. むすびにかえて

本稿において筆者は初めて歴史資料に取り組むことを試みたが，初歩的ないわば入り口の段階で原稿をまとめなければならなくなり，力の不足を痛感している。今後に多くの課題を抱えることになったが，膨大な資料を少しずつ紐解いていきたいと思っている。また，台湾のいくつかの小地域の詳細な事実を集め，それらを比較検討することも，外部からの圧力と政治統合という問題に迫るためにも必要であると考えている。

文　　献

I．邦文・華文

外務省条約局法規課
1964 『外地法制誌〈第3部の3〉：日本統治下五十年の台湾』 外務省。

伊能嘉矩
1902 『台湾志』 東京：文学社。
1904 『台湾蕃政志』 台湾総督府民政部殖産局。
1918 「歴史上より観たる台湾の民蕃結婚に就きて (a) (b)」『東洋時報』236: 23–24, 237: 25–26。
1965a 『台湾文化志（上）』 東京：刃江書院。（復刻版）
1965b 『台湾文化志（中）』 東京：刃江書院。（復刻版）
1965c 『台湾文化志（下）』 東京：刃江書院。（復刻版）

鹿野忠雄
1942 「台湾原住民族の人類地理学的研究序説」『地理学研究』1(3): 353–364。

1946 「パイワン族古代伝承の青銅柄附短剣——台湾におけるドンソン文化の波及——」鹿野忠雄〔著〕『東南亜細亜民族学先史学研究』 東京：矢島書房，pp. 198–214。

岸田幸吉
1985 「台湾高砂族の織——小林保祥氏の戦前における調査記録より——」『月刊染織 α』 東京：染織と生活社，Nos. 50: 62–65, 51: 23–25, 52: 62–65。

馬淵東一
1974a 「高砂族の分類——学史的回顧——」『馬淵東一著作集（第2巻）』 東京：社会思想社，pp. 249–273。
1974b 「高砂族の移動及び分布（第一部）（第二部）」『馬淵東一著作集（第2巻）』 東京：社会思想社，pp. 275–460。
1974c 「高砂族民族史」『馬淵東一著作集（第2巻）』 東京：社会思想社，pp. 503–518。

宮原　敦
1936 「台湾パイワン族が焼成せりと伝うる壺について」『南方土俗』 4(1): 1–45。

宮本延人
1935 「台湾蕃族の貝貨の一種について」『民族学研究』 1(1): 128–133。
1957 「高砂族ガラス玉小記」『民族学研究』 21(4): 89–93。
1985 『台湾の原住民族——回想：私の民族学調査——』 東京：六興出版。

任　先民
1960 「臺灣排灣族的古陶壺」『中央研究院民族学研究所集刊』 9: 163–224。

中村孝志
1936 「オランダ資料に表われた台湾蕃社戸口」『南方土俗』 4(1): 42–59。
1937 「蘭人時代の蕃社戸口表（二）」『南方土俗』 4(3): 234–240。
1949 「台湾におけるオランダ人の採金事業——17世紀台湾の一研究——」『天理大学学報』 1(1): 271–324。
1952 「オランダ人の台湾蕃人教育——1659年の巡視報告を中心として——」『天理大学学報』 8: 81–22。
1953 「台湾における鹿皮の産出とその日本輸出について」『日本文化ヤマトブンカ』 33: 101–132。
1954 「台湾史概要（近代）」『民族学研究』 18(1•2): 113–122。
1964a 「オランダ治下台湾における地場の諸税について（上）」『日本文化』 41: 62–81。
1964b 「オランダ治下台湾における地場の諸税について（下）」『日本文化』 42: 1–27。
1964c 「オランダの台湾経営」『天理大学学報』 15(3): 66–83。

岡村吉右衛門・張　永欣
1968 『台湾の蕃布（上）（下）』 京都：有秀堂。

王　育徳
1971 『台湾——苦悶するその歴史——』 東京：弘文堂。

史　明
1974 『台湾人四百年史——秘められた植民地解放の一断面——』〔増補改定版〕（初版1962）東京：新泉社。

清水泰次
1954 「明代福建の農家経済——特に一田三主の慣行について——」『史学雑誌』 63(7): 1–21。

台湾総督府警察本署〔編〕
1918a 『理蕃誌稿（第1編）』 台湾総督府。
1918b 『理蕃誌稿（第2編）』 台湾総督府。

台湾総督府民生部蕃務本署〔編〕
1913 『理蕃概要』 台湾総督府。

蔡　淵絜
1986 「清代台湾的移墾社会」『中央研究院民族学研究所専刊乙種第16号《台湾社会與文化変遷》（上）』 pp. 45–67。

上海市戯曲学校中国服装史研究組〔編著〕

1984 『中国服飾五千年』 香港：商務印書館香港分館。
蔣 毓英・高 拱乾・范　咸〔編〕
1985 『重脩臺灣府志（上）（中）（下）』 北京：中華書局。
台湾銀行経済研究室〔編〕
1957 『清代台湾経済史』（《台湾研究叢刊》45） 台北：台湾銀行。
臺灣經世新報社
1922 『鳳山縣志』（《臺灣全誌》第4巻） 台北：臺灣經世新報社。

II. 欧文

CAMPBELL, W.M.
1903 *Formosa under the Dutch: Described from Contemporary Records,* London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co, Ltd.

CHEN, Chi-lu
1968 *Material Culture of the Formosan Aborigines,* Taipei: Chin-hwa Press.

FERRELL, Raleigh
1969 *Taiwan Aboriginal Groups: Problems in Cultural and Linguistic Classification.* (Institute of Ethonology Academia Sinica Monograph, No. 17, Taipei).

SHEPHERD, John R.
1981 *Plains Aborigines and Chinese Settlers on the Taiwan Frontier in the Seventeenth and Eighteenth Centuries.* (Unpublished Ph. D. Dissertation, Submitted to the Department of Anthropology and the Committee on Graduate Studies of Stanford University).

コメント

清　水　　純

台湾における漢族と原住民諸族との接触が本格的に開始されたのは最近数百年の出来事であり，文献資料としては古くはオランダ統治時代および清朝時代の記録，そして近いところでは日本の台湾領有時代の記録が参照できる。とはいえ，これらの記録は，それぞれ書かれた目的も，内容も，また記録者の視点や観察の細かさも異なるので，そのままの形で利用することはむずかしく，断片的な資料を集めて再構成しなおすという根気のいる作業が必要となる。フィールドワークに重点をおく我々人類学者は，このような文献資料による歴史の再構成の仕事を後回しにしてしまいやすい傾向がある。しかし，歴史資料は，現時点での観察に頼るフィールドワークの不足分を補ってくれるものであり，時間の流れの中で変化の問題を追うという，別な視点を与えてくれる。しかも漢族社会の辺境に位置する台湾では，漢族と原住民との接触の問題を考える場合，過去の記録の利用はとくに必要な手続きなのである。松澤論文はこのような基本的な作業に正面から

取り組み，さらに今後の同様な研究の継続の可能性と必要性を示したという意味で注目に値する。

本論文では交易を1つの手掛かりとして考察が進められているが，台湾における交易の問題を考える際に，まず注目する必要があるのは，山岳地帯の高砂族よりも，むしろ，もともと平地に居住し，外来者と直接接触をしていた平埔族と総称される諸族である。開拓初期においては平埔族を仲介として漢族商人からの交易品が台湾内部での流通経路を確保したと推測される。しかも，平埔族の人々の漢化の歴史はそのまま台湾における漢族社会の拡大，発展の歴史と重なる。そのなかにあって，農民の入植に先立つ原住民との交易関係は，漢族と原住民との関係発展史の第1段階をなすものと位置づけられる。そのような意味からも，平埔族に関する記録の集成がもう少し欲しかったところである。

ところで，評者（清水）は台湾北東部の平埔族研究に関心があり，これまでの研究から見て松澤論文に関して少し補足すべき点があると思われるので以下に述べてみたい。

本論文中に示されたオランダ時代の交易について，平地原住民からオランダ側に渡った品目の主なものが鹿皮であったことを，著者（松澤）は指摘している。確かに台湾西部の平原地帯の場合は，原住民の狩猟によって獲得される豊富な鹿皮が交易に重要な役割を果たしていた。しかし，北東部の宜蘭平原においては事情はやや異なっていた。宜蘭平原ではオランダ時代に，すでに原住民クヴァラン族の間で，稲作がかなりの程度で行なわれていた。そしてオランダの記録によれば，宜蘭の原住民と他地域の原住民との交易において，すでに米が重要な品目となっていたのである。例えば『バタヴィヤ城日誌』にはつぎのような記述がある。

「カバラン Cabbalan においてもまた余る程の米および若干の鹿皮あり。キマウリならびにサンチャゴの住民は彼らの要する米を得んがため同所（注：パリシナーンと呼ばれた宜蘭平野の原住民の村）に行き，これに対して中国人が持ち渡

りて交換せる鉄鍋，カンガン布および他の粗悪なる布を与う[村上　1972: 282]。」

ここで見るかぎりでは，漢族商人が直接宜蘭地域を訪れて商売をしたというよりも，むしろ基隆付近にあったキマウリ，サンチャゴなどの村の平埔族（ヴァサイ族）が漢族商人から得た品物を持ってカバランすなわち宜蘭平野へ赴き，そこの原住民（クヴァラン族）の生産する米と交換していたのである。

1644年9月になると，オランダ東インド会社は宜蘭平野の原住民を帰順させることを目的として，ボーン大尉率いる軍隊を派遣するが，この時にもクヴァラン族の米の生産力を窺わせる記述がある。オランダ人たちは台湾のほかの地域の住民に対するのと同様に，会社に帰順した証拠として毎年鹿皮を持参して服従の意志を表わすようにと告げたところ，12か村は服従承諾の意思を表明したが，しかし鹿皮の代わりに米を納めたいと申し出たのである。一方，オランダ人に抵抗の構えを見せた2村に対して，軍隊は攻撃を加えて村を焼き払ったが，この時この2村には多くの米が蓄えられていたという。

漢化以前の宜蘭の原住民が稲作に従事し，（おそらく集約的な耕作方法ではなかったと思われるが，それでも）高い生産力を有していたという事実は，単に交易の問題にとどまらず，漢族農民の入植者との関係においても重要な示唆を与えてくれる。

漢族が宜蘭平野に侵入し，開拓に着手したのはオランダ人の渡来よりさらに150年後の18世紀末のことであった。歴史資料によると，クヴァラン族は案外容易に漢族の勢力に屈し，その後は漢族との雑居，そして急速な漢化の道をたどることになった。このようなクヴァラン族の漢化の速度のはやさは，ひとつには漢族のもたらした灌漑水稲耕作の受容と係わっていたのではないだろうか。もともと稲作を主な生業とし，米の生産に関心があったからこそ，より高い生産性を持つ漢族

の技術をはじめとして，稲作に係わる習俗など，文化的側面にいたるまで積極的に取り入れ，その結果漢族への傾斜を強めたことが想像される。クヴァラン族の老人の語るところによれば，日本統治時代にはもうアワなどの雑穀は栽培せず，もっぱら稲作を行なってきたという。また，漢族の年中行事も早い段階から，彼らの生活に根を下ろしてきたことが窺える。このように漢族への同化を考えるとき，彼らにとっては生業形態が1つの重要な契機になったと思われる。

以上クヴァラン族に関して若干の補足をしてみたが，このように交易の品目やそれらの生産活動に着目することは，さらに当時の原住民の生業，漢化など別の側面を明らかにすることにつながる。今後，より多くの文献資料が整理され，全体像の把握に向けて，交易以外の側面にまで研究が広がることを期待したい。

文献

村上直次郎〔訳注〕・中村孝志〔校注〕
1972 『バタヴィヤ城日誌 (2)』（平凡社東洋文庫 205） 平凡社。

リプライ

松　澤　員　子

評者（清水）の指摘どおり，漢族と山地原住民との接触，とりわけ交易を取り上げる場合，その仲介の役割を果たした平地原住民（平埔族）の漢化の過程を知るための資料集成とその分析から出発するのが当然であろう。また，平地原住民の伝統的な（すなわち漢化以前）の親族・婚姻制度に関しても，さらに資料を整理することが必要である。そうした課題を残しながら，この論文は，パイワン族の首長制がオランダ占拠時代の鹿皮交易によって成立したのではないかというフェレル (Raleigh Ferrell) の仮説 [Ferrell 1969: 47] に対して，問題提起をすることを目的としたのであって，本文で取り上げた筆者の見解（本文291頁参照）を実証していくには，今後上記の作業を進めていかなければならないと考え

ている。

また，この論文を書き上げた後に，シェファード (John R. Shepherd) の西部を中心とした平地原住民の漢化の過程，特に土地所有に焦点を当てた論文 [SHEPHERD 1981] を入手したが，論旨の大幅な修正を要請される資料は含まれてはいなかった。しかし，今後渉猟すべき資料や課題については，多くの教示を得た。特に首長制に関しては，オランダ時代から清代にかけて，首長の権威を表象するさまざまの物品が与えられていたことが明らかにされている。この点，今後再考を要するであろう。

さらに，清代初期には平地では鹿が激減するが，それ以後原住民から漢人に渡った交易品が何であったか，さらに調査を進めなければならないと思っている。すべて今後の課題としたい。

文献　（前掲「松澤論文」末尾《文献》を参照のこと）